

第 87 回麻布獣医学会 一般演題 3

マクロアデノーマの犬の一例

立花 麻子¹, 石川 剛司², 圓尾 拓也², 根尾 櫻子³, 久末 正晴³¹ 麻布大学附属動物病院, ² 麻布大学小動物臨床, ³ 麻布大学内科学第二

【はじめに】

マクロアデノーマは、下垂体に発生する直径 1 cm 以上の巨大腺腫であり、下垂体性副腎機能亢進症の犬の 10 ～ 20% に認められ、しばしば神経症状を伴う。今回、我々はマクロアデノーマの犬に遭遇しその臨床病理学的検査および治療経過について報告する。

【症例】

症例は 8 歳齢、去勢雄のミニチュアダックスフンドで体重 7.95 kg。3 か月前より活動性低下、睡眠時無呼吸を主訴に近医を受診した。紹介病院の身体検査において、多食だが無気力で、時折頭を壁に押し付けるなどの異常行動および多飲多尿を認めた。また、ACTH 負荷試験において、血中コルチゾール濃度 pre 4.7 $\mu\text{g/dl}$, post1 時間後 28.6 $\mu\text{g/dl}$, 高用量デキサメサゾン抑制試験において血中コルチゾール濃度 pre 5.5 $\mu\text{g/dl}$, post4hr 8.9 $\mu\text{g/dl}$, post8hr 6.3 $\mu\text{g/dl}$ であり、副腎皮質機能亢進症を診断され、精査を目的に本学を受診した。初診時身体検査において被毛粗剛、腹部膨満、血液検査において肝酵素上昇 (ALT 129 IU/l, ALP 772 IU/l), 腹部 X 線検査において肝臓辺縁の鈍化、腹部超音波検査において左右副腎の軽度肥大 (左副腎 7 mm, 右副腎 8.3 mm) を認め、尿比重 1.030, 凝固系検査および FDP は正常範囲内、D-ダイマーは上昇 (1.22 $\mu\text{g/ml}$) していた。また、内因性 ACTH 濃度は正常範囲内 (28 pg/ml) であった。マクロアデノーマを疑い、第 10 病日 CT 検査を実施し、下垂体高は

15 mm であり、同日より放射線療法 (6.5Gy, 5 門, 4 回照射) を開始した。第 24 病日頃から活動性は改善し、第 85 病日には、肝酵素の減少を認めた (ALT 130 IU/l, ALP 436 IU/l)。第 113 病日、CT 検査において下垂体高は 9 mm に減少、肝酵素も正常範囲内 (ALT 97 IU/l, ALP 260 IU/l) となった。軽度の多飲多尿や皮膚の菲薄化は認められるものの、発毛が見られるなど治療効果は次第に見られ始めている。

【考察】

本症例は、(1) ACTH 負荷試験では、副腎皮質機能亢進症の診断はグレーゾーン、(2) 内因性 ACTH の値は正常範囲、(3) 高用量デキサメサゾン抑制試験の結果は副腎腫瘍を疑う所見、など下垂体性の副腎皮質機能亢進症を疑いづらく、通常の犬の副腎皮質機能亢進症の臨床病理学的アプローチでは、鑑別診断が困難であったと思われる。本症例では、臨床症状および検査所見が副腎皮質機能亢進症に合致し、かつ神経異常が見られ臨床病理学的検査所見もマクロアデノーマでは矛盾しないことから、頭部 CT 検査を行い確定診断することが可能であった。また、マクロアデノーマでは放射線照射が有効であるとされており、本症例でも比較的早期に神経症状の喪失と肝酵素の改善が認められ、腫瘍の縮小も認められた。副腎皮質機能亢進症の症状については、通常半年から一年かけて徐々に改善することが多いとされており、今後注意深く観察する予定である。